

決められないことの内的作業

－ ポストモラトリアム時代を生きる若者を通して考える －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
山中 裕美子

自身を「決められない」人だと認識、公言する人がいる。物事を決める際、迷ったり悩んだり考えたりすることは誰しもが経験することだが、決められないことにとらわれてしまう人もいたのである。近年では「決められない」ということが流行のように取り上げられ、決められない要因について、決められない人が批判的に表現されることが多くある。また、決められない人自身も「決められない」という性質を受け入れることで、決められない問題は深く思考されることがなくなっている。これらの背景には場の空気を読まなければならない社会の中で生きる、若者たちの姿があり、「決められない」問題は個人の問題とはいえない。

本研究では、現代の「決められない」とされる若者たちが物事を決められない間、どのようなことを考え、何を課題に感じながら決断をしているのか、どのように自身との折り合いをつけているのか、決められないことそれ自体の内実を決められない人の視点から探ることを目的としている。そして、「決められない」は本当に脱しなければならないものなのか、を改めて考えることとした。論文中では、決められない問題がこれまでどのように語られてきたか、空気を読む世代の特徴を踏まえ、決められない人に決められない間に行っている作業、思考の変化などをインタビューした。なお、本研究では非日常場面における決断は誰しもが悩む健全なプロセスであると捉え、日常場面における決断について主に取り上げている。

インタビューを通して見えてきたことは、「決められない」ということの中には様々な作業や思考が含まれており、一概に批判的に見ることはできないということである。決められない人は決められないことにポジティブな印象も持っており、多様な選択肢を視野に入れられていること、決断を先延ばしにする間、新たなアイデアを待つというような見方を持っていた。また、決められない間に自身と向き合う作業をすることで意思の強さや誠実さを確認していることがわかった。

一方、場の空気を読むことによって自身の主張が出来ず、主張そのものを失っているのではないかと、という可能性も見出された。空気を読みすぎることで生じる弊害を若者自身が自覚することが必要不可欠であり、「空気を読む」という多義的な言葉を捨てる必要があると考える。今後、「決められない」問題は、決められない人と他者の両面から議論されることが望まれる。